

研究ノート

観光都市ヴェネツィアの現状と今後の展望
— 2023年9月、危機遺産リスト登録の勧告を踏まえての一考察 —

竹 田 文 雄

(長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科)

Venice, the city of tourism: current status and future
prospects ;
— A study in light of the recommendation for inclusion on the List of
World Heritage in Danger in September 2023 —

Fumio TAKEDA

(Department of International Tourism, Faculty of Human and Social Studies,
Nagasaki International University)

Abstract

Venice is a unique and world-renowned tourist city, distinguished by its countless large and small canals and the many gondolas going, as well as its impressive tourism resources such as St. Mark's Basilica and the Rialto Bridge. Venice and its lagoon were registered as a World Heritage list in 1987 in recognition of their extraordinary architectural value. Since then, however, the city has accelerated its transformation into a tourist destination, and the number of visitors to the city has increased dramatically. In addition, many large cruise ships began to call at the port, and also combined with climate change factors, led to concerns about the deterioration of the environment that should be preserved as a World Heritage, then as a result, the city was twice recommended for listing as a World Heritage in Danger, in 2021 and 2023.

This study attempts to present an overview of how and why the events have occurred since Venice was inscribed on the World Heritage List, and then looks at the future of tourist city Venice and attempts to present the issues.

Key words

Venezia, World Heritage, World Heritage in Danger, Overtourism, Aqua Alta (High tide)

要 旨

ヴェネツィアは、その大小無数の運河とその運河を行き来するゴンドラや、サン・マルコ大聖堂やリアルト橋などの印象深い観光資源によって、他に類を見ない、世界的に知られている観光都市である。そしてこのヴェネツィアと周辺の潟は、その文化的価値が評価されて1987年に世界遺産に登録されている。しかしながらその後は観光地化が加速し、来訪者が激増した。また大型クルーズ船が多数寄港するようになり、気候変動の要素も相まって、世界遺産として保持すべき環境の悪化が懸念された結果、2021年と2023年の二度にわたって危機遺産登録の勧告を受けてしまったのであった。

本稿は、世界遺産に登録された後のヴェネツィアにどのような事象が発生してきたのか、その経緯と理由を概観した上で、観光都市ヴェネツィアの今後を展望し、課題の提示を試みるものである。

キーワード

ヴェネツィア、世界遺産、危機遺産、オーバーツーリズム、アクア・アルタ（高潮）

はじめに

ヴェネツィアは、サン・マルコ大聖堂やリアルト橋などの印象深い観光資源と、大小無数の運河を行き来するゴンドラによって世界的に知られている観光都市である。

このヴェネツィアは、「ヴェネツィアとその潟」の名称にて1987年に世界遺産に登録された。しかしながらその後、特異で比類なき地勢とその風情から観光地化が加速し、大型クルーズ船も多数寄港するようになった結果、来訪者は増加の一途をたどる。そしてその数は徐々にヴェネツィアの応需能力を超え、諸々の環境の劣悪化を招いたため、2021年に危機遺産リストへの登録が勧告された。この2021年の勧告は、ヴェネツィアの水路が「国定記念物」に指定されて、大型クルーズ船の入港を禁止するなどの措置が講じられたことで登録は見送られたのだが、ふたたび2023年に危機遺産リストへの登録が勧告されたのであった。2023年の勧告については、ヴェネツィア本島（歴史地区）への入島税徴収などの対策を立案したことが評価されて危機遺産リストへの登録は見送られた。しかしながら、その入島税徴収の手法には反対意見もあり、気候変動への対策の進捗なども含めていまだ予断を許さない状況下にある。

本研究は、ヴェネツィアという世界に類を見ない特異な観光都市が、新型コロナウイルス感染症の流行（以下パンデミックと略す）収束後の旅行需要復活とともにふたたびオーバーツーリズムの災禍に直面することを仮定して、その災禍を最小限に抑えるための手法の考察と課題の提示を試みることを目的とした。

本稿の構成は、第1章にて世界遺産構成資産とヴェネツィア観光の現状を概観し、第2章では1987年の世界遺産への登録から、その後2023年の危機遺産リスト登録への勧告に至るまでの経緯を確認した。第3章は危機遺産リスト登録勧告の引き金となったヴェネツィ

アのオーバーツーリズムについて考察し、第4章にて観光都市ヴェネツィアの今後を展望し、課題の提示を試みた。

なおヴェネツィア市 (Comune di Venezia) は、以下の地域に大別される。本稿ではそれぞれの地域の呼称を基本的に下記のとおりとする。

- ・ヴェネツィア市全域 (Comune di Venezia) : ヴェネツィア市
- ・ヴェネツィア本島およびジューデカ島 (Citta Storica) : 本島歴史地区
- ・リド島 (Lido) : リド島
- ・本土のメストレ地区およびマルゲラ地区 (Terraferma) : 本土地区

1. 世界遺産構成資産とヴェネツィア観光の特徴

1.1. 世界遺産「ヴェネツィアとその潟」の構成資産

海の都¹⁾ ヴェネツィアが世界でも有数の観光都市であることを疑う余地は無いであろう。しかしながら世間一般的に知られているヴェネツィアの観光資源は幾つあるのだろうか。本章ではまずこの点から確認してみたい。ちなみに1987年に世界遺産に登録された「ヴェネツィアとその潟」の構成資産は以下の6つである。

- (1) サン・マルコ大聖堂
- (2) サン・マルコ広場
- (3) ドゥカーレ宮殿
- (4) カナル・グランデの建築群
- (5) リアルト橋
- (6) フランケッティ美術館 (カ・ドーロ)

1.2. ヴェネツィア観光の特徴

そこで日本の旅行会社が造成するパッケージツアーに含まれるヴェネツィア観光の内容と特徴を、そのツアーのパンフレットを参照して概観してみよう。上級商品は有料見学エ

リアの入場を組み込むことで差別化を図っているが、いずれのツアーもヴェネツィア観光の内容は以下の3つの観光コンテンツのみである（図表1）。

(1) サン・マルコ大聖堂（サン・マルコ広

場および鐘楼の外観観光を含む）

(2) ドゥカーレ宮殿（ため息の橋の外観観光を含む）

(3) ゴンドラ遊覧（上級カテゴリー商品ではカンツォーネシンガー同行の場合あり）

図表1：パッケージツアーに含まれるヴェネツィア市内観光コンテンツ

1) ツアーに含まれるヴェネツィア市内観光コンテンツ(パンフレット掲載分)			
サン・マルコ大聖堂	① 入場観光(1階+2階)※1	② 入場観光(1階のみ)	③ 外観のみ観光
ドゥカーレ宮殿	④ 入場観光	⑤ 外観のみ観光	
ゴンドラ遊覧	⑥ カンツォーネシンガー同行	⑦ ゴンドラ乗船のみ	
2) パッケージツアー名、および企画旅行会社			
a) JTB ポンジョルノ イタリア 8日間		① ④ ⑥ ⑧	
b) JTB イタリア満喫 8日間		② ⑤ ⑦ ⑨	※2
c) JALパック "ブラーヴォ！" イタリア8日間		① ④ ⑦ ⑩	
d) JALパック ゆっくり周遊ベニス・フィレンツェ・ローマ8日間		① ④ ⑦ ⑧	
・上記2社の主力パッケージツアーパンフレットから引用。 ※1：2階の有料見学エリア(博物館・バルコニー)への入場を含む。 ※2：異なる出発曜日にてヴェネツィア本島に宿泊するコースあり。			
3) 宿泊ホテルのロケーション			
	⑧ ヴェネツィア本島	⑨ ヴェネツィア・メストレ地区(本土)	
	⑩ ヴェネツィア・ジュデカ島	⑪ その他(本土の他都市)	

(出典：(株) ジャルパックおよび (株) JTBの2023年度下期商品パンフレットより執筆者作成)

リアルト橋（世界遺産構成資産）は、いずれのツアーの観光コンテンツにも含まれていない。ただしパンフレットなどで「自由行動時に足を運ぶお勧めスポット」として紹介されているケースが多く、またSNS映える自撮りスポットとして人気を博している。

ヴェネツィアの観光ルートは、このように主要な観光コンテンツがサン・マルコ地区とリアルト地区に集中することもある。パッ

ッケージツアーのみならず個人旅行であっても半日程度の徒歩観光が基本とされている。またその傾向は日本人のみならず、世界各国からの来訪者にも該当すると見て取れる。そして世界各国からの来訪者が急激に増加して、さらには本島歴史地区の中でもこれらの特定地区に集中することがヴェネツィア観光の特徴であるが、この特徴こそが、ヴェネツィアがいま抱えている懸念事項をもたらしたと執

図表2（左）：サン・マルコ大聖堂2階バルコニーからのサン・マルコ広場の眺望

図表3（右）：サン・マルコ大聖堂2階博物館に展示された「サン・マルコの馬」



(図表2、3ともに執筆者撮影)

筆者は考察している。

アレックス・カー・清野由美（2019）がその著書の冒頭に「最近の日本は観光客が急増したことにより、いたるところで「観光公害」ともいふべき現象が引き起こされるようになりました。」と述べているが、この観光公害がヴェネツィアでも起きている。パンデミックの発生によってこの観光公害ともいえる現象は2020年にいったん沈静化したものの、2021年以降、来訪者数はふたたび増加の一途にあり、ヴェネツィアを取り巻く環境は以前の状況に急速に戻りつつある。

2. 世界遺産登録から危機遺産勧告までの経緯（観光都市ヴェネツィアの現状）

2.1.世界遺産への登録

まず「ヴェネツィアとその潟」が1987年に世界文化遺産に登録された際の基準を概観する。この基準については国際連合教育科学文化機関（以下、ユネスコと省略）世界遺産委員会のホームページにて、「世界文化遺産『ヴェネツィアとその潟』は、ヴェネツィアが躍動的な歴史の中心であったことと、独自の芸術文化を完成し得たことが最も重要な認定要素である。」との説明とともに、以下の6項目が選定基準として掲載されている（見出しのみ抜粋）²⁾。

- (1) 潟（ラグーン）に浮かんでいるように見えるヴェネツィアは、世界でも傑作と言える建築物が建ち並ぶ都市の一つである。
- (2) ヴェネツィアの建築様式は、アドリア海や東地中海の都市に大きな影響を与えた。
- (3) かつて世界中の海と文化をつないだヴェネツィアは、現在でも存在し続けている。
- (4) 町にはヴェネツィア共和国時代の技術を示す建築物が多く現存している。

(5) ヴェネツィア周辺の潟（ラグーン）は独特の生態系を持ち、これを利用した漁村や小屋、耕作地なども価値が高い。

(6) マルコ・ポーロが地中海を越えて世界を冒険したように、ヴェネツィアの商人の開拓精神は、人類の歴史の発展に貢献した。

2.2.危機遺産（危機にさらされている世界遺産）

ユネスコ世界遺産委員会は、紛争や自然災害、また観光開発や環境悪化などの影響によって、その普遍的な価値を損なうような重大な危機にさらされている世界遺産を「危機遺産」と認定し、危機遺産リストに登録して管理している。世界遺産委員会のホームページではその定義が以下のように説明されている。

The List of World Heritage in Danger is designed to inform the international community of conditions which threaten the very characteristics for which a property was inscribed on the World Heritage List, and to encourage corrective action.

（危機にさらされている世界遺産リストは、世界遺産リストに登録された遺産の特徴そのものを脅かす状況を国際社会に知らせ、是正措置を促すことを目的としています。）³⁾

ヴェネツィアが初めて危機遺産リストへの登録の勧告を受けたのは2021年であった。ユネスコ世界遺産委員会の諮問機関、ICOMOS（International Council on Monuments and Sites、国際記念物遺跡会議；以下イコモス）が、世界遺産委員会の開催に先立って「世界遺産「ヴェネツィアとその潟」は危機遺産に相当する」と勧告したことに端を発している。それは主に大型クルーズ船のヴェネツィア水

域航行に対する警鐘であった。大型クルーズ船の航行によって生じる大きな波が、ヴェネツィアの埋め立てた地盤と潟の生態系に悪影響を及ぼしていると判断されたためである。

この勧告に対してヴェネツィアの水路が「国定記念物」に指定されて、大型クルーズ船のヴェネツィアへの入航禁止が決定。同年8月1日より、排水量2万5,000トン以上、または船長180メートルを超える大型クルーズ船のサン・マルコ広場沖合ラグーンおよびジュデッカ運河の航行を禁止する措置が取られた。この対応が評価されて危険遺産リストへの登録を免れている。

2023年9月、サウジアラビアのリヤドで開催された第45回ユネスコ世界遺産委員会拡大大会において、世界文化遺産「ヴェネツィアとその潟」はふたたび危機遺産リストへの登録が審議された。今回も事前にイコモスから「危機遺産に相当する」旨が勧告されたが、その主旨は「世界遺産登録以降も続く域内開発、気候変動、オーバーツーリズム、および人間の干渉による継続的な劣化の影響がヴェネツィアの顕著な普遍的価値に不可逆的な変化ともたらす恐れがある」が、この世界遺産の価値を維持するための対策が不十分である、という内容であった。

2.3.危機遺産勧告について（気候変動要素）

気候変動については「アクア・アルタ」（高潮、以下アクア・アルタと省略）の増長が危惧されている。直近では2019年11月12日に本島歴史地区の水位が観測史上2番目の187センチに到達した。この時は本島歴史地区の85%以上が浸水し、サン・マルコ寺院ではタイルやモザイク画などが海水に浸かって劣化する被害に遭っている。アクア・アルタは、満潮、シロッコと呼ばれる南からの風、低気圧の3つが重なる時にラグーン（潟）内の水量が増えて発生するとされてきたが、昨今の

地球温暖化の影響による海面上昇も関与していると言われている。

イタリア政府は、アクア・アルタの対策として「モーゼ計画」を着工している。正式名称「Modulo Sperimentale Elettromeccanico」の頭文字（MOSE）から名付けられたこの計画（以下、モーゼ計画）は、アドリア海の外洋とヴェネツィアのラグーン（潟）のあいだに可動式の防潮堰を設置するプロジェクトである。平常時は周囲の景観保全のために海中に沈んでいる防潮堰が、海水の水位が一定以上を超えると立ち上がるのだ。2020年に一部が完成し、その後順次稼働を始めているので、アクア・アルタについてはこのモーゼ計画の完成によって一定の改善が期待できるであろう。

ただし世界的な気候変動の影響により、高潮のみならず、干ばつも発生していることを記しておく。たとえば2023年2月、ヴェネツィアは前代未聞の大干ばつに見舞われた。本島歴史地区の小運河の多くが干上がり、ゴンドラなどの船舶が航行できなくなってしまったのであった。気候変動については今後も注視が必要であろう。

図表4：2019年、リド水路で試験中のモーゼ水門



（出典：日経スタイル電子版 2022年9月8日掲載「ベネチアの水没救うモーゼ計画 生物多様性は守れるか」 PHOTOGRAPH BY MARCO ZORZANELLO）

2.4.危機遺産勧告について（オーバーツーリズム要素）

2023年9月、第45回ユネスコ世界遺産委員会拡大大会の開催を前にして、イタリア政府が提示した対策案はオーバーツーリズムへの対応が中心であった。その対策案の骨子を以下に書き出す。

- ・ 来訪者がピークとなる春や夏などの30日間を目安に、ヴェネツィア歴史地区への日帰り来訪者を対象に1日に5ユーロの入場料を試験的に徴収する。
- ・ 徴収した入場料は環境保全のために使用する。
- ・ 具体的な徴収方法などについては今後策定する。

ユネスコ世界遺産委員会拡大大会での「ヴェネツィアとその潟」についての審議は、「翌年より日帰り来訪者から入場料を取るなど、すでに対策が計画されていることから、対策実施後の状況を見定めるべき」との結論に至り、危機遺産リストへの登録は見送ることが決定。しかしながらユネスコ世界遺産委員会はこの決定に際し、「ヴェネツィアとそのラグーンの適切な保護のためにはさらなる進展がまだ必要」であり、「現時点では不十分な対策」との警告を発出した。よってイタリア政府は2024年12月までに詳細な改善計画を提示することが求められ、2025年の世界遺産委員会ですべてその成果が審議される予定である。

3. オーバーツーリズム

第3章では、危機遺産リストへの登録勧告の引き金のひとつとなったヴェネツィアのオーバーツーリズムに着目する。本島歴史地区における観光公害や居住人口の減少に拍車をかけた状況を、先行研究およびヴェネツィア市が発刊した統計などを基にその影響を考

察していく。

3.1.オーバーツーリズムの定義

オーバーツーリズムについてはすでに多くの発信と先行研究がなされている。たとえば2019年6月に観光庁から発出された「持続可能な観光先進国に向けてp14-15」では、オーバーツーリズムの定義を「観光地やその観光地に暮らす住民の生活の質、及び／或いは訪れる旅行者の体験の質に対して、観光が過度に与えるネガティブな影響」と表している。

また、谷本由紀子・谷本義高（2020a）が「観光の持続性」に触れたオーバーツーリズムの定義を説明しているので紹介する。

オーバーツーリズムは、観光が発展する中で特定の観光地において、自然環境、社会文化、経済、政治、市民生活、観光資源、観光客の満足等様々な要因と、観光客や住民、地域、産業等の関係者の利害が複雑に絡み合って生じた現象であり、各要因と利害関係者（ステイクホルダー）が許容できる範囲を超えたもの、と定義できる。これを「広義のオーバーツーリズム」といい、特に観光客の急激な増加や過剰な増加等を契機として、クローズアップされる観光の持続可能性に関わる全ての現象と問題が包含されることになる。⁴⁾

ここで指摘されているように、オーバーツーリズムの契機は、観光客もしくは来訪者の急激な増加や過剰な増加である。そこで、この来訪者の増加の度合いをヴェネツィア市の観光統計を基に確認してみよう。

3.2.ヴェネツィアを訪れる来訪者の規模感

ヴェネツィア市全体、すなわち本島歴史地区（Citta storica）、リド島（Lido）、本土地区（Terraferma）の3地区への来訪者の合計は延べ人数にて、2009年は340万5千人で

図表5：ヴェネツィア市および各地区の年間来訪者延べ人数（2009年と2019年との対比、単位：千人）

地域	年	旅行者	差異
① Comune di Venezia（ヴェネツィア市）	2009	3,405	
	2019	5,523	2,118
② Citta storica（本島歴史地区）	2009	2,097	
	2019	3,515	1,418
③ Lido（リド島）	2009	166	
	2019	143	-23
④ Terraferma（本土地区）	2009	1,143	
	2019	1,864	721

（出典：ヴェネツィア市発刊 Annuario del Turismo dati2021-2011より執筆者作成）

あった。これが2019年には552万3千人に増加している。

図表5では、本島歴史地区のみならず、本土地区への来訪者も増加している点に着目したい。これは本島歴史地区にある宿泊施設群の価格が高騰していること（稼働率上昇による販売価格つり上げ）、および本土地区の宿泊施設の拡充にともなう宿泊地シフト（本島歴史地区から本土地区へ）が起きていることなどがその要因であると推察できる。たとえば日本発のメディア型や価格訴求型のパッケージツアーの多くが本土地区を宿泊地設定していることから、この傾向がうかがえる。

また本土地区への宿泊地シフトについては、谷本由紀子・谷本義高（2020b）が指摘している、「日帰り観光客（デイ・トリッパー）」

の増加の一要素であるとも推察できる。その一例として、2023年2月に執筆者がヴェネツィアへ視察のために出向いた時は、本土地区にあるヴェネツィア・メストレ駅の近くに宿泊している。それはカーニバルのエンディングと重なって本島歴史地区に宿泊先を確保できなかったためではあるが、ヴェネツィア・メストレ駅から本島歴史地区にあるヴェネツィア・サンタルチア駅までは1駅、所要時間は11分である。また早朝から深夜まで1時間に数本の列車が運行され、本島歴史地区へ容易に出かけることができた。この簡便さも本土地区宿泊を選択する理由となっているのであろう。

続いて、ヴェネツィアの人口とヴェネツィアへの来訪者数の推移について見てみたい。

図表6：本島歴史地区人口、ヴェネツィア市人口とヴェネツィア市年間来訪者延べ人数の推移

年	ヴェネツィア本島歴史地区人口(単位:人)	ヴェネツィア市人口(単位:人)	ヴェネツィア市年間訪問者数(単位:人)
1952	174,448	319,115	651,036
1955	167,069	329,461	890,826
1960	145,402	347,002	1,039,486
1965	123,733	363,719	1,334,546
1970	111,550	367,528	1,664,107
1975	104,206	364,550	1,674,182
1980	95,222	352,453	1,692,998
1985	86,072	334,932	1,835,190
1990	78,165	317,837	1,961,300
1995	71,053	298,967	2,319,752
2000	66,386	275,368	2,748,614
2005	62,296	269,780	3,237,623
2010	59,621	270,884	3,708,407
2015	55,589	263,352	4,495,857
2019	52,143	259,297	5,523,283
2020	51,208	256,146	1,337,626
2021	50,434	254,850	2,120,894

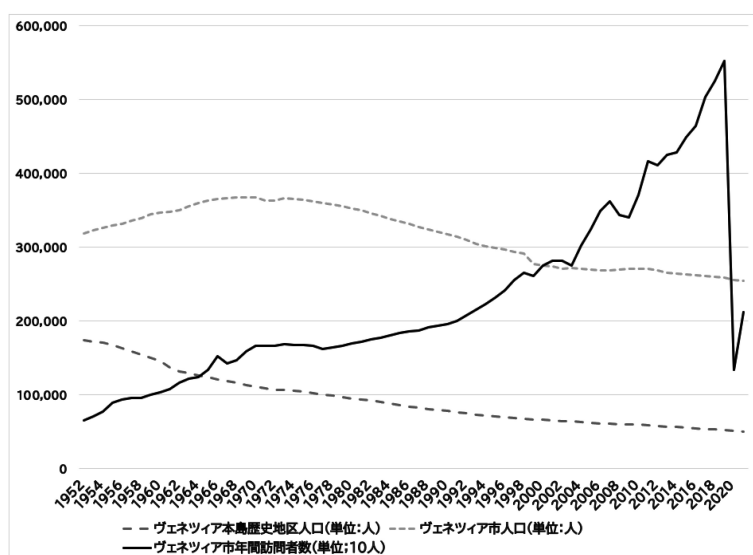
(出典：ヴェネツィア市発刊「Annuario del Turismo / Scarica l'Annuario del Turismo 2021」、Interiorissimiホームページ「Quanti sono gli abitanti di Venezia: i dati aggiornati al 2023 Pubblicato sul sito web Febbraio 5, 2023」、より執筆者作成)

図表6からは、ヴェネツィアの人口減少傾向とヴェネツィア来訪者延べ人数の増加傾向が反比例している点に気が付くであろう。本島歴史地区の人口のピークは1952年の17万4千人、またヴェネツィア市全体の人口のピークは1968年の36万7千人であり、いずれもその後は漸減の傾向が止まらないようにうかが

える。

また図表7は、図表6のそれぞれの数値が示す傾向の表出を試みたものである。なおINTERIORISSIMIのホームページによると、2022年の本島歴史地区人口はついに5万人を割り込む49,665人まで下落したとのことである⁵⁾。

図表7：本島歴史地区人口、ヴェネツィア市人口とヴェネツィア市年間来訪者延べ人数の推移(折れ線グラフ)



(出典：ヴェネツィア市発刊「Annuario del Turismo / Scarica l'Annuario del Turismo 2021」、Interiorissimiホームページ「Quanti sono gli abitanti di Venezia: i dati aggiornati al 2023 Pubblicato sul sito web Febbraio 5, 2023」、より執筆者作成)

3.3.人口の減少

さて本島歴史地区にてなにが起きているのであろうか。図表7を俯瞰してみると、来訪者の増加と人口の漸減の傾向が見て取れる。特に本島歴史地区の住民が徐々に転出(転居)しているが、その転出理由として以下の例が推察される。

- ・プライベートスペースの減少(来訪者による道路や小広場の占拠など)
- ・不動産価格の高騰(空き家への投機的投資、賃貸家賃の高騰など)
- ・居住者の変化(外国人居住者の増加)
- ・アクア・アルタによる水害の増加

特に本島歴史地区における人口の減少は、来島来訪者数が過剰となり、観光産業を含むヴェネツィアの都市インフラに支障をきたしてしまったこと、そしてその支障が様々な事象に悪影響をもたらしていることが根本の課題として見受けられる。この点について Bertocchi・Visentin(2019)は、「旅行者が管理され計画されなければ、その都市の社会・都市構造や地域住民の生活を根本的に変えてしまう」と述べているが、まさにそのとおりであろう。観光客などの来訪者の激増によって住環境が変化したためにその土地から転居していく。これは観光がもたらす弊害とも言えるし、オーバーツーリズムがもたらす影響であるとも言えよう。

4. 観光都市ヴェネツィアの今後の展望と課題の提示

2023年9月に開催されたユネスコ世界遺産委員会拡大大会において、ヴェネツィアの危機遺産リストへの登録は見送られたが、果たしてこの結論は正しかったのであろうか。本章では観光都市ヴェネツィアの今後を展望し、想起できる課題についての考察をすすめる。

4.1.イタリア政府の提示した対策

上記「2.4.危機遺産勧告について(オーバーツーリズム要素)」にて既述のとおり、ユネスコ世界遺産委員会は2023年の「危機遺産リストへの登録見送り」決定に際して、「世界文化遺産『ヴェネツィアとその潟』の適切な保護のためにはさらなる進展がまだ必要」との判断を示し、「現時点では不十分な対策」との警告を発出した。

さてこの「現時点では不十分な対策」が示すことは、たとえば「繁忙期における日帰り来訪者に対して5ユーロ(予定)の入島税を試験的に徴収し、その資金を環境保全のための運用に回す」程度の対策では不十分であり、ヴェネツィアのオーバーツーリズム再発はまったく抑制できない、という見解であると推察できる。

言い換えると、5ユーロ程度の入島税では来訪者の入島に歯止めはかけられない。来訪者の人流が増えることで起きるオーバーツーリズムは、その人流を緩めない限りは改善に結びつかないと考えられる。しかしながら入島税の税額の高い低いに関わらず、現実的には本島歴史地区への入島規制は難しい。そこで入島する来訪者の意識改革を促していく啓蒙活動、たとえば「分散の働きかけ」や「観光地ヴェネツィアを大切に思う意識の醸成」などの推進が求められることとなる。その来訪者への啓蒙施策としてすでに策定されている、#EnjoyRespectVeneziaをここで取り上げてみる。

4.2. #EnjoyRespectVenezia

#EnjoyRespectVeneziaは、国連が2017年を「開発のための持続可能な観光の国際年(International Year of Sustainable Tourism for Development)」と制定したことを機に、来訪者を「責任ある行動」と「環境、景観、芸術的な美しさ、およびヴェネツィア住民のアイデンティティの尊重」へ導くために振興

されたヴェネツィア市のキャンペーンであり、持続可能なヴェネツィア観光事業の推進を目的とするものだ。すなわち#EnjoyRespectVeneziaは、本島歴史地区における環境と景観の保全や、住民のアイデンティティの尊重などを来訪者の行為規範として提示した啓蒙活動である。そして具体的には以下の項目により構成されている。

- ・ 休憩所および公衆トイレの地図
- ・ 責任あるビジターに向けた最良旅行（執筆者意識：来訪者に向けた12のアドバイス）
- ・ デツーリズム（Detourism：サステイナブルな、定番観光コースではないルートの発見）
- ・ 認可宿泊施設の地図
- ・ アクア・アルタの説明
- ・ よくある質問

特に「責任あるビジターに向けた最良旅行（来訪者に向けた12のアドバイス）」は、来訪者の意識の向上を目的としたものである。ゆえに#EnjoyRespectVeneziaのこの項目は、パンデミック収束後に来訪者数がふたたび増加しつつあるいま、あらためて声高に旅行者へ訴求していくべきであろう⁶⁾。

なおこの活動の導入時についてIanniello・Cánoves（2022）は、「地元自治体も観光問題に積極的に対処し、緩和しようと試みている。地面や階段に座って食べ物を食べたり、飲み物を飲んだり、ゴミを捨てたりするような、観光客にとって不適切と思われる行動は制裁の対象となり、明確に禁止されるようになった。特定の日に自治体は、#EnjoyRespectVeneziaのユニフォームを着た検査官を組織し、街の品位を落とすとみなされる行動を積極的に監視・抑制している。」とその状況を記している。

ちなみに当該キャンペーンでは、罰金をともなう来訪者の行動規制が初めて設けられた。執筆者はこの罰金制定を評価する。なぜなら

ばパンデミック発生前の来訪者の傍若無人（もしくは自由奔放）な振る舞いには、歯止めをかけるために強制力も必要であると考えられるからだ。宗田好史（2020）はその著書にて「この30年間にヴェネツィア市当局が何もしなかったわけではない。観光客の増加に追いつかなかったのである。」と述べている。現実はまだにそのとおりであったのであろう。また崔錦珍（2020）はオーバーツーリズムの弊害を減らしていくための代表的な対応策を示している⁷⁾。

- ・ 観光客の総量制限
- ・ 観光客の分散の誘導
- ・ 課税と観光文化教育システムの構築
- ・ 地域住民に観光発展と地域発展の関係に対して理解を深める場の提供

これらの4項目は、#EnjoyRespectVeneziaの日本版とも評価できる内容である。

4.3. オーバーツーリズムの未然防止・抑制に向けた対策パッケージ（案）

ところで、2023年10月18日に開催された日本の観光立国推進閣僚会議において、「オーバーツーリズムの未然防止・抑制に向けた対策パッケージ（案）」⁸⁾が発表された。「持続可能な観光地域づくりの実現のための取組に国は総合的な支援を行う」という方針が打ち出されたこの対策パッケージ（案）は、以下の3項目から成立している（見出しのみ抜粋）。

1. 観光客の集中による過度の混雑やマナー違反への対応
2. 地方部への誘客の推進
3. 地域住民と協働した観光振興

この対策パッケージ（案）には、地域において発生している主な課題例や対策事例も掲載されているので、新たに課題を設定する際の手本としても優れていると評価できる。そこで日本のこの対策パッケージ（案）を、ヴェ

ネツィア版に置き換えてみてはいかがだろうか。具体的な手法は別途の考察を要するが、日本版を手本としたヴェネツィア版が策定されれば、既存の#EnjoyRespectVeneziaをフォローアップする本島歴史地区のオーバーツーリズム緩和策として、効力を発揮するのではなかろうか。このメイドインジャパンの対策パッケージ（案）に着目し、また活用することによって、ヴェネツィアを救うための最善策が展開されることに期待したい。

5. 結語

2020年のパンデミック発生によって旅行者の総数は全世界的に激減したが、ヴェネツィアへの来訪者数の回復は顕著である。2023年2月に執筆者がヴェネツィアを視察した時にも「確実に戻りつつある」という印象を抱いた。たとえばリアルト橋の中央の通路などではすでに来訪者の渋滞が発生していたからだ。

さて、このままではヴェネツィアが再びオーバーツーリズムの災禍に直面することが容易に展望できる。よってその前に早急に対策を講じることが喫緊の課題である旨を本稿で述べてきた。そこで、我が国の「オーバーツーリズムの未然防止・抑制に向けた対策パッケージ（案）」のエッセンスを盛り込んだ「#EnjoyRespectVenezia」をあらたに策定することにより、ヴェネツィアへの来訪者の意識改革の強化が期待できであろうことを提示した。この手法がより具体的に検証されていくことが望まれる。

最後にヴェネツィアの持つ、世界に類を見ない特徴について考えてみたい。たとえば、訪れる者すべてを心身ともに魅了し心を奪われるような感覚、旧市街の建物と運河のコントラストの美しさ、一步間違えると抜け出せない迷宮（ラビリンス）のような幻想的な世界、非日常の景観、誰もが映画の主人公になれる街、など様々なフレーズが想起されるの

ではなかろうか。なお執筆者は観光都市ヴェネツィアの特徴と魅力を「非永久的な多様性」と称している。非永久的であるから、守っていくためには努力と研鑽が求められるのであろう。

ビザンツ文化を色濃く残した海の都ヴェネツィアが、持続可能な観光都市であり続けるために、また世界文化遺産「ヴェネツィアとその潟」が健全に運営管理され続けるために、ひきつづきこの研究を進めてまいりたい。

注)

- 1) 塩野七生 (2009) : 『海の都の物語 ヴェネツィア共和国の一千年 1』新潮文庫
- 2) unesco World Heritage Convention (Venice and its Lagoon) : HP (2023)

<https://whc.unesco.org/en/list/394>
[accessed 22-10-2023]

「世界文化遺産「ヴェネツィアとそのラグーン」は、ヴェネツィアが躍動的な歴史の中心であったことと、独自の芸術文化を完成し得たことが最も重要な認定要素である。」

・登録基準 (i)

潟（ラグーン）に浮かんでいるように見えるヴェネツィアは、世界でも傑作と言える建築物が建ち並ぶ都市の一つである。118の小さな島の上に築かれたヴェネツィアの街は、ラグーンの水面に浮かんでいるように見えるような忘れがたい風景を作り上げている。そしてその計り知れない美しさは、カナレット、グアルディ、ターナー、その他多くの画家たちにインスピレーションを与えた。ヴェネツィアのラグーンには世界でも有数の傑作が集中している。

・登録基準 (ii)

ヴェネツィアの建築様式は、アドリア海や東地中海の都市に大きな影響を与えた。

アドリア海や東地中海の都市の建築手法や建築様式に対してヴェネツィアが与えた影響は絶大である。ダルマチア沿岸、小アジア、エジプト、イオニア海の島々、ペロポネソス、クレタ、キプロスなどの主たるモニュメントは明らかにヴェネツィア様式に従って建設されている。またヴェネツィアは、ベッリーニ、ジョルジョーネ、ティツィアーノ、ティントレット、ヴェロネーゼ、ティエポロなどの偉大な画家たちを通して絵画や装飾芸術の面でもその影響力を発揮し、ヨーロッパ全体の絵画と装飾芸術の発展に決定的な足跡を残した。

- ・登録基準 (iii)
かつて世界中の海と文化をつないだヴェネツィアは、現在でも存在し続けている。
今なお息づく遺跡のような異彩を放つ「海の女王」ヴェネツィアは、東洋と西洋、イスラム教とキリスト教を結ぶ架け橋であり、何千ものモニュメントや過ぎ去った時代の名残を通して生き続けている。
 - ・登録基準 (iv)
町にはヴェネツィア共和国時代の技術を示す建築物が多く現存している。
ヴェネツィアには、共和国時代の栄華を物語る比類ない建築のアンサンブルがある。サン・マルコ広場やサン・マルコ大聖堂、ドゥカーレ宮殿のような偉大なモニュメントから、13世紀のスクォーレ病院やカンビにある住宅群まで、ヴェネツィアは中世建築の美を完全な形でいまに伝えている。
 - ・登録基準 (v)
ヴェネツィア周辺の潟（ラグーン）は独特の生態系を持ち、これを利用した漁村や小屋、耕作地なども価値が高い。
地中海地域においてのヴェネツィアのラグーンは、自然の変動と気候の変動が生み出した、傑出した「ひがた」の例である。このまとまりのある生態系では、泥の棚（水面上と水面下を交互に繰り返す）がヴェネツィアの島々と同様に重要であり、杭上住居、漁村、水田は、宮殿や教会に劣らず保護される必要がある。
 - ・登録基準 (vi)
マルコ・ポーロが地中海を越えて世界を冒険したように、ヴェネツィアの商人の開拓精神は、人類の歴史の発展に貢献したということ。ヴェネツィアは人類の歴史と直接的に結びついている。海の女王はその小さな島々に雄々しく佇みながら、ラグーン、アドリア海、地中海の彼方までその視野を広げ、活動していた。マルコ・ポーロ（1254～1324年）が旅立ったのはヴェネツィアからだ。サン・ロレンツォにある彼の墓は、世界発見におけるヴェネツィア商人の役割を思い起こさせる。
- 3) unesco World Heritage Convention (World Heritage in Danger) : HP (2023)
<https://whc.unesco.org/en/158>
[accessed 22-10-2023]
- 4) 谷本由紀子、谷本義高（2020）：「ヴェネツィアにおけるオーバーツーリズムとその概念に関する一考察（1）：日本・京都への示唆」『関西外国語大学研究論集』112号pp233-252
- 5) INTERIORISSIMI:HP (2023)「Quanti sono gli abitanti di Venezia: i dati aggiornati al 2023」
<https://interiorissimi.it/quant-sono-gli-abitanti-di->

venezia

[accessed 23-10-2023]

- 6) Città di Venezia : HP (2019)「#Enjoy Respect Venezia」
<https://www.comune.venezia.it/ja/content/enjoyrespectvenezia>
[accessed 23-10-2023]
- ・観光客のあまりいない場所でヴェネツィアの秘蔵を発見し、その並外れた美しさを愉しみましょう。
 - ・ヴェネツィアのラグーナの島々や本土を探索し、大都市各地で開催されているイベントに参加してみましょう。
 - ・特産物やヴェネツィアの郷土料理を味わいましょう。
 - ・今も尚ヴェネツィアに存在する伝統工芸品の工房を訪問してみましょう。オリジナル商品のみをセレクトし、違法業者からの商品の購入は避けましょう。
 - ・ヴェネツィアの古代史を伝える能力を有する認定観光ガイドもしくはツアーアシスタント付きツアーを予約しましょう。
 - ・右側通行で歩き、橋の上で立ち止まったり、手押しであっても自転車の運行は止めましょう。
 - ・モニュメント、教会の階段、橋、井戸、海岸は、ピクニックをする場所ではありません。地図を参照し、休憩には公園を活用しましょう。
 - ・サン・マルコ広場エリアは名所であり、所定のスペース以外で飲食するために立ち止まることはできません。
 - ・ヴェネツィアは芸術の街です：野営やキャンプ、上半身裸で歩き回ったり、飛び込みや遊泳は許可されていません。ビーチを楽しみたい方は、リド島やベッレストリーナ島がおすすめです。
 - ・環境や芸術遺産を尊重しましょう：ゴミを捨てたり、文字や絵の落書きをしたり、ハトに餌を与えたりしないでください。
 - ・アパートに滞在する場合は、分別ゴミの収集に協力しましょう。
 - ・比較的閑散期のヴェネツィア訪問を選択し、旅行を計画してみましょう。ツーリスト会報も参照してみましょう。
- 7) 崔錦珍（2020）：「オーバーツーリズムの発生と持続可能な観光発展の課題」『九州国際大学国際・経済論集』第5巻 pp193-206
<https://kiu.repo.nii.ac.jp/record/760/files/kokusaikeizai5-009choi.pdf>
(2023年10月26日閲覧)
- ・第一は、総量制限である。問題は受容力超過から始まっているので、住民との協議を経て時間制限、入場客数、入場料などで量を管理し、許可を得た

- 観光ガイドとの同行だけ入場を許可する方法がある。
- ・第二は、観光客の分散を誘導することである。京都の事例で言及したとおり、時間の変更やまだ認知度が低いものや場所の魅力をアピールする方法である。そのために IT 技術を使ってリアルタイムで各観光スポットの混雑状況を知らせるアプリの開発も進んでいる。
 - ・第三は、課税と観光文化教育システムの構築である。観光客に観光税、宿泊税、環境負担金などを課することで、観光地の保存や地域住民の生活環境を維持・改善していくことである。また、観光客が守らなければならないルールを制定し広報する。観光エチケットに関する広報もオン・オフラインで実施する。
 - ・第四は、地域住民に観光発展と地域発展の関係に対して理解を深める場を提供することが必要である。さらに街の共同基金などを造成し観光収益金が住民に還元できるようなシステムをつくることが重要である。住民の実生活に役に立つ支援を行っていくことによって住民との間のネガティブな認識を変えていく。
- 8) 首相官邸 (2023) 観光立国推進閣僚会議 配布資料「観光の現状について」p5
<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kankorikkoku/dai21/siryou.pdf>
 (2023年10月26日閲覧)
- ・国内外の観光需要は急速に回復し多くの観光地が賑わいを取り戻しているが、都市部を中心とした一部地域への偏在傾向も見られ、観光客が集中する一部の地域や時間帯等によっては、過度の混雑やマナー違反による地域住民の生活への影響や、旅行者の満足度の低下への懸念も生じている状況であり、適切な対処が必要。
 - ・地方部への誘客をより一層強力に推進し、全国津々浦々あまねく観光客を呼び込んで行く。
 - ・観光客の受け入れと住民の生活の質の確保を両立しつつ、持続可能な観光地域づくりを実現するためには、地域自身があるべき姿を描いて、地域の実情に応じた具体策を講じることが有効であり、国としてこうした取組に対し総合的な支援を行う。
- 参考・引用文献**
- アレックス・カー、清野由美 (2019) :『観光亡国論』中央公論新社
- 片瀬葉香 (2016) :「世界における危機遺産の現状と課題に関する一考察」『九州産業大学商経論叢』第56巻第3号113号pp19-36
- 観光庁:HP (2019)「持続可能な観光先進国に向けて」pp14-19
<https://www.mlit.go.jp/common/001293012.pdf>
 (2023年10月19日閲覧)
- 塩野七生 (2009) :『海の都の物語 ヴェネツィア共和国の一千年 1』新潮文庫
- 首相官邸:HP (2023)「観光立国推進閣僚会議」配布資料「観光の現状について」pp5-8
<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kankorikkoku/dai21/siryou.pdf>
 (2023年10月23日閲覧)
- 陣内秀信、高村雅彦 (2013) :『水都学 I 特集 水都ヴェネツィアの再考察』法政大学出版局
- 世界遺産検定:HP (2019)「2019年3月『ヴェネツィアとその潟』 今月の世界遺産」
<https://www.sekaken.jp/whinfo/monthwh/w001/>
 (2023年10月20日閲覧)
- 谷本由紀子、谷本義高 (2020) :「ヴェネツィアにおけるオーバーツーリズムとその概念に関する一考察 (1) : 日本・京都への示唆」『関西外国語大学研究論集』112号pp233-252 / 2020a (p242) / 2020b (p247)
- 谷本由紀子、谷本義高 (2021) :「ヴェネツィアにおけるオーバーツーリズムとその概念に関する一考察 (2) : 日本・京都への示唆」『関西外国語大学研究論集』113号pp285-303
- 崔錦珍 (2020) :「オーバーツーリズムの発生と持続可能な観光発展の課題」『九州国際大学国際・経済論集』第5巻 pp193-206
- トラベルボイス:HP (2021)「イタリア政府、オーバーツーリズム再発防止に向けて本腰、ベネチアへの大型クルーズ船の入港禁止を発効 2021年07月15日」
<https://www.travelvoice.jp/20210715-149230>
 (2023年10月23日閲覧)
- トラベルボイス:HP (2023)「観光庁、「オーバーツーリズム対策パッケージ」を取りまとめ、地域と住民が協働した観光振興、観光客向けの乗合タクシーの導入など 2023年10月18日」
<https://www.travelvoice.jp/20231018-154447?media=tvm>
 (2023年10月23日閲覧)
- 日経クロステック電子版 (2023)「伊ベネチアに「危機遺産」勧告 ユネスコ 2023年8月10日」
<https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/01162/00239/>
 (2023年10月23日閲覧)
- 宗田好史 (2020) :『インバウンド再生 コロナ後への観光政策をイタリアと京都から考える』学芸出版社

- Altun Emin (2022). 「The Dichotomy of Overtourism: How Did Venice Become Venice?」
 Università Ca'Foscari Venezia
 Archivio delle tesi, Tesi di laurea (dall'anno accademico 2011/2012),
<http://hdl.handle.net/10579/21570>
 [accessed 25-10-2023]
- Bertocchi Dario¹, Visentin Francesco² (2019). 「The Overwhelmed City”: Physical and Social Over-Capacities of Global Tourism in Venice」
 1 Ca'Foscari University of Venice, 2 University of Udine
 Sustainability 2019, 11(24), 6937;
<https://doi.org/10.3390/sul1246937>
 [accessed 21-10-2023]
- Città di Venezia : HP (2023) 「Annuario del Turismo 2011-2021」
<https://www.comune.venezia.it/it/content/studi>
 [accessed 21-10-2023]
- Città di Venezia : HP (2019) 「#Enjoy Respect Venezia」
<https://www.comune.venezia.it/ja/content/enjoyrespectvenezia>
 [accessed 23-10-2023]
- Gardelli Maria Vittoria (2020). 「Impatto del Turismo sulla città di Venezia: un'analisi della percezione dei residenti」
 Università Ca'Foscari Venezia
 Archivio delle tesi, Tesi di laurea (dall'anno accademico 2011/2012),
<http://hdl.handle.net/10579/17034>
 [accessed 23-10-2023]
- Giovanni Ianniello, Gemma Cánoves (2022). 「Tourismification in Venice (Italy): A study on the effects of mass tourism on a historic city built on a lagoon island」
 Cuadernos de Turismo, n° 49, (2022); pp173-187
 Universidad de Murcia eISSN:1989-4635
<https://doi.org/10.6018/turismo.521861>
 [accessed 22-10-2023]
- INTERIORISSIMI:HP (2023)
 「Quanti sono gli abitanti di Venezia: i dati aggiornati al 2023」
<https://interiorissimi.it/quant-sono-gli-abitanti-di-venez-ia>
 [accessed 23-10-2023]
- Peeters Paul et.al. : (2018) 「Research for TRAN Committee - Overtourism: impact and possible policy responses」
 European Parliament, Policy Department for Structural and Cohesion Policies, Brussels.
[https://www.europarl.europa.eu/thinktank/en/document.html?reference=IPOL_STU\(2018\)629184](https://www.europarl.europa.eu/thinktank/en/document.html?reference=IPOL_STU(2018)629184)
 [accessed 21-10-2020]
- Swissinfo.ch : HP (2022)
 「Venezia scesa sotto 50mila abitanti in centro storico」
<https://www.swissinfo.ch/ita/tutte-le-notizie-in-breve/venezia-scesa-sotto-50mila-abitanti-in-centro-storico/47819466>
 [accessed 23-10-2023]
- unesco World Heritage Convention (Venice and its Lagoon) : HP (2023)
<https://whc.unesco.org/en/list/394>
 [accessed 22-10-2023]
- unesco World Heritage Convention (World Heritage in Danger) : HP (2023)
<https://whc.unesco.org/en/158>
 [accessed 22-10-2023]
- UNWTO 「Overtourism'? - Understanding and Managing Urban Tourism Growth beyond Perceptions」
<https://www.e-unwto.org/doi/book/10.18111/9789284420070>
 [accessed 02-10-2023]
- Zannini Andrea : (2014) 「Il turismo a Venezia dal secondo dopoguerra ad oggi」
 OpenEdition journals Edizione digitale
<https://journals.openedition.org/laboratoireitalien/848>
 DOI: 10.4000/laboratoireitalien.848
 ISSN: 2117-4970
 [accessed 25-12-2023]